

ポジティブ・レイベリング

佐藤 恵

本稿は、従来のレイベリング論では主題的に扱われてこなかった、肯定的なサンクションを伴うレイベリングを、ポジティブ・レイベリングとして概念化する。社会学的分析対象としてのポジティブ・レイベリングは、被レイベリング者のアイデンティティに対して、それがレイベリングであることに由来する抑圧的効果をもたらす相互作用過程である。本稿は、事例に基づき、次の二つのポジティブ・レイベリングについて考察する。(1) 社会的ポジティブ・レイベリングが、行為者の自己過程内で自己ポジティブ・レイベリングに転化されることによって、他者に対するクレーム申し立てでは解決できない不可視的な問題経験として現象する場合。(2) 先行する自己ネガティブ・レイベリングの解消手段として自己ポジティブ・レイベリングを構成する戦略が、肯定的自己定義のエスカレーションを招来し、そこからの離脱を困難にする場合。

1. 問題の所在——ポジティブ・レイベリングの何が問題か——

[事例1]

芥川龍之介の小説「或日の大石内蔵助」で描かれた大石内蔵助は、亡君の仇討ちを成し遂げた後、江戸市中での賞賛を耳にするにつけ、不快さ・うしろめたさといった感情を経験する。赤穂浪士四十七人が主君の復讐の本懐を遂げながら、江戸中で仇討ちが流行しているということを知った内蔵助は、「自分たちのした事の影響が、意外な所まで波動したのに、聊驚い」て、「春の温もりが、幾分か減却したかのような感じ」を覚える（芥川 [1917→1968: 12-13] ルビ原文）。また、彼らの忠義へのほめそやしが、変心して討ち入りに参加しなかった同志への貶めと相関していることを見出した内蔵助は、こう考える。「何故我々を忠義の士とする為には、彼等を人畜生(マ)としなければならないのであ

ろう。我々と彼等との差は、存外大きなものではない」(芥川 [1917→1968: 17-18])。そして内蔵助の不快を決定的にしたのは、彼が討ち入り前に尽くした放埒の生活のすべてが、嘆賞の対象にされたことであった。曰く、「高尾や愛宕の紅葉狩も、佯狂の彼には、どの位つらかった事であろう。島原や祇園の花見の宴も、苦肉の計に耽っている彼には、苦しかったのに相違ない」云々（芥川 [1917→1968: 18] ルビ原文）。

「如何に彼は、この記憶の中に出没するあらゆる放埒の生活を、思い切って受用した事であろう。そうして又、如何に彼は、その放埒の生活の中に、復讐の拳を全然忘却した駈蕩たる瞬間を、味った事であろう。彼は己を欺いて、この事実を否定するには、余りに正直な人間であった。勿論この事実が不道德なものだなどと云う事も、人間性に明な彼にとって、夢想さえ出来ないところである。従っ

て、彼の放埒のすべてを、彼の忠義を尽す手段として激賞されるのは、不快であると共に、うしろめたい。（中略）彼の復讐の挙も、彼の同志も、最後に又彼自身も、多分このまま、勝手な賞讃の声と共に、後代まで伝えられる事であろう。——こう云う不快な事実と向いあいながら、彼は火の気のうすくなった火鉢に手をかざすと、伝右衛門の眼をさけて、情無さそうにため息をした」（芥川 [1917→1968: 20] ルビ原文、下線引用者）。

賞賛というポジティブ・サンクションが、芥川の描く大石内蔵助にとっては不快さ・うしろめたさといったネガティブな感情しかもたらさなかったわけである。この事例は、ポジティブ・サンクションの対象である大石内蔵助の、過去のすべての行為の意味が拘束され（“主君の仇討ちのため”）、そうした行為を遂行した内蔵助の人格が肯定的に評価される（“忠義”）ようなケースである。ある目的に向けて自己が遂行した先行行為に対して賞賛というポジティブ・サンクションが与えられ、それが彼の他の目的に向けられた行為や彼の人格自体を遡及的に再解釈し、意味拘束するのである。ここに見られるような、ポジティブ・サンクションの、当事主体のアイデンティティに対する抑圧的効果に関しては、これまでのところ十分な概念化の作業が行われてきたとはいいがたい。しかしながら、経験レベルでは、こうした効果は日常的に生じうることである。

本稿においては、この事例に見られるごとく、社会的価値規準に照らしてポジティブとされる価値評価を随伴する社会的カテゴリーを特定の行為とその行為者に対して付与し、それに基づく待遇を行う相互作用上の一連のプロセスをポジティブ・レイベリングと呼ぶ。

ここで、そもそも何故ポジティブ・レイベリングがことさら問題とされねばならないのか、これを述べておこう。第一に、後述の如く、ポジティブ・レイベリングをネガティブ・レイベリングと同型の相互作用過程と理解することができるということである（社会学的分析対象としてのポジティブ・レイベリング）。

第二に、ポジティブ・レイベリングとは、社会的価値規準に照らして肯定的な人格評価を随伴するようなレイベリングである。だが、レイベリングが随伴する人格評価が肯定的／否定的であるということと、被レイベリング者がレイベリング体験によって苦痛を感受しない／苦痛を感受するということとは、独立である。したがって、ポジティブ・レイベリングによって被レイベリング者に想定されたアイデンティティと、自己の定義するアイデンティティとの乖離は、自己の後続行為によって埋めていけばよい、といった類の議論は、本稿の立場からは排除される。自己と他者との一連の相互作用過程としてポジティブ・レイベリング・プロセスを把握するという段階の次に考えねばならないのは、それがレイベリングであることに由来する、被レイベリング者のアイデンティティに対する抑圧性なのであり、この点に関しての検討は、社会学的研究があまり蓄積されていないように思われるのである（抑圧的相互作用関係としてのポジティブ・レイベリング）。

それに加えて第三に、ポジティブ・レイベリングを受け、他者の期待が重荷となった被レイベリング者＝「良い子」の自己抑圧が、他者に対するクレーム申し立てでは解決できない不可視的問題経験として把握されるということである（不可視的問題経験としてのポジティブ・レイベリング）。

以下では、まず第2章で社会学的分析対象と

してのポジティブ・レイベリング現象の概念規定を行い、その抑圧性を指摘した後で、第3章で抑圧的相互作用関係としてのポジティブ・レイベリングのうち、自己—他者関係におけるポジティブ・レイベリング（社会的ポジティブ・レイベリング）について考察し、そして第4章で抑圧的相互作用関係としてのポジティブ・レイベリングのうち、自己—自己関係におけるポジティブ・レイベリング（自己ポジティブ・レイベリング）についての考察を行うこととする。

2. ポジティブ・レイベリング現象の概念規定

レイベリング論のインプリケーションの一つを、行為者の行為の属性から、他者による定義の過程へという視点の移行に見出すならば、もはやレイベリング論の射程はひとり逸脱現象のみに限定されるものではない。

すでに大村と宝月 [1979] は、自己の先行行為（primary performance）→他我の裁定（sanction）→自己の後続行為（secondary performance）といった相互作用過程としてレイベリング・プロセスを把握しており、この見地から、否定的裁定のみならず肯定的裁定、つまり同意を含めてレイベリング論のロジックを取り上げると、リースマンの「他者志向型」社会論も同型のロジックとして理解できるということを示している（大村 & 宝月 [1987: 32-38]）。そして大村と宝月は、逸脱や犯罪だけではなく、「善」も「同調」も、自己の先行行為の内容ではなく、他我の肯定的裁定に依存するものであることを指摘する（大村 & 宝月 [1979: 41]）。

「われわれはある行為を、それが善だから賞賛するのではなく、われわれが賞賛するから善なのである」。また「同調はあるひとがコミットした行為の性質ではなく、むしろ他者によって規則と（肯定的）サンクションがその〈同調者〉に適用された結果である」と言わねばなるまい」（大村 & 宝月 [1979: 41]）。

また、徳岡 [1987] の第五章「アイデンティティ形成」は次のように述べる。すなわち、大村と宝月 [1979] の上のような視点に基づくと、ネガティブ・サンクションからネガティブ・パフォーマンスへという狭義のレイベリング・プロセスだけでなく、ポジティブ・サンクションからポジティブ・パフォーマンスへといった成功者のキャリア形成のプロセスをも、また、その中間的位置を占めるものとして、ポジティブ・サンクションがネガティブ・パフォーマンスを抑止するという、非行理論としての自己観念論をも考察の対象にすることが可能になる（徳岡 [1987: 136-137]）。そして徳岡は、ローゼンタールらに始まる「ピグマリオン効果」（教師期待効果 teacher expectation effects）の研究や、レックレスらの自己観念論の研究をめぐる考察から、「重要な他者」によるレイベリングが被レイベリング者のアイデンティティを変容させるのか否かについては必ずしも明らかではないものの、少なくとも、他者の期待（ポジティブ・サンクション）が行為者の後続行為において自己成就したことは確かだ、と結論づける（徳岡 [1987: 161]）。

ローゼンタールらによる「ピグマリオン効果」、すなわち「教師期待効果」（teacher expectation effects）＝教師期待の自己成就予言効果とは、社会的価値基準からはポジティブな

サンクションが加えられることによって、自己にとってポジティブなパフォーマンスが結果されるという促進的相互作用効果である。

ローゼンタールらは、「オーク・スクール」実験で、郊外の下層階級地域の小学校の1学年～6学年の3名ずつの教師を被験者に選んだ。年度初めの一般的な知能検査の後、教師には、この試験が知的開花が遅れているが1年間で学力の発達が見込まれる生徒を発見する特別の試験であると告げられ、被験者のクラスから2～3名の生徒が抽出された。

年度の終わりに前と同じ一般的な知能検査を実施したところ、実験群の生徒たちの得点は対照群の生徒のそれを上回っていた。これは特に、1学年と2学年で顕著に見られ、また実験群の男子より女子に顕著であった。こうした結果から、ローゼンタールらは、生徒の学力に対する教師の期待が自己成就予言として機能し、期待が現実になるような仕方では教師を行動させるという結論を出したのである（Rosenthal&Jacobson [1968]）。

けれども、ローゼンタールらの研究は、実験の開始時と終了時との生徒の得点の差を測定したにすぎず、教室における教師と生徒の相互作用過程については考察していない。徳岡も詳論しているように、このローゼンタールらの研究それ自体は、実験者と教師との関係に焦点が合わせられているので、徳岡の結論を支持するのは、むしろ次のレックレスらの研究の方であるように思われる。

レックレスらの「自己観念」論とは、ポジティブなサンクションがネガティブな後続行為を阻止するという抑止的相互作用効果である。これは、レックレスらがオハイオ州コロンバスの非行多発地域に居住する「いい子」(good boy)群と「悪い子」(bad boy)群との比較調査およ

び追跡調査から主張した議論であり、「いい子」群は自己にとっての「重要な他者」たちとの関係の中で、社会的に受容されうる好ましい自己観念を形成しているがために、非行多発地域に住みながらも非行に走ることが抑制されているというものである（Reckless他 [1957a, 1957b, 1960, 1962]）。

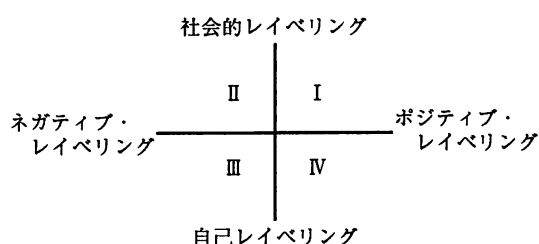
黒柳徹子の自伝的小説『窓ぎわのトットちゃん』に登場する校長先生の「君は、本当は、いい子なんだよ」という言葉は、レックレスらの研究と同様の抑止的相互作用効果を持つものであった。

「おそらく、トットちゃんに関しては、苦情や心配の声が、生徒の父兄や、他の先生たちから、校長先生の耳にとどいているに違いなかった。だから校長先生は、トットちゃんに、機会あるごとに、「君は、本当は、いい子なんだよ」といった。その言葉を、もし、よく気をつけて大人が聞けば、この「本当は」に、とても大きな意味があるのに、気がついたはずだった。「いい子じゃないと、君は、人に思われているところが、いろいろあるけど、君の本当の性格は悪くなくて、いいところがあつて、校長先生には、それが、よくわかっているんだよ」校長の小林先生は、こう、トットちゃんに伝えたかったに違いなかった。残念だけど、トットちゃんが、この本当の意味がわかったのは、何十年も、経ってからのことだった。でも、本当の意味は、わからなくても、トットちゃんの心の中に、「私は、いい子なんだ」という自信をつけてくれたのは、事実だった。だって、いつも、なにかをやるとき、この先生の言葉を思い出していたんだから」（黒柳 [1981→1984: 216-217] 下線引用者）。

これらの先行研究から明らかになったことは、行為者と他者との社会的相互作用過程において、他者によるポジティブなサンクションが、行為者の先行行為をポジティブに意味付与し、かつ他者の期待を織り込んだポジティブな後続行為を行為者に遂行せしめるということである。

従来のレイベリング論がネガティブ・レイベリング現象のみに議論を限定してきたのは、大村 [1979: 141] もいうように、ポジティブ・レイベリング現象に比べ、事態の深刻度がよりはなはしいからであろう。また、徳岡の総括するところによれば、レイベリング論は1960年代から70年代にかけてのアメリカ社会における社会不信、制度不信、人間不信を反映したイデオロギーであった (徳岡 [1987: 50-58])。そのような社会的文脈に関係づけて顧みるならば、レイベリング論が社会的ネガティブ・レイベリング現象 (図のⅡ) のみに焦点を合わせたのも理解できることではある。

しかしながら、そのためにレイベリング論は次の二点を看過する結果を招いてしまった。第一に、社会的ポジティブ・レイベリング (図のⅠ) に、被レイベリング者の自己定義を無効化する抑圧性が存在すること。そして第二に、社会的ポジティブ・レイベリングが自己ポジティブ・レイベリング (図のⅣ) へと深化し、他者や社会に対するクレーム申し立てではその抑圧が解消しえぬ事態となること。



* ポジティブ/ネガティブとは、付与されるカテゴリーに随伴する人格評価が、社会的価値規準に照らして肯定的/否定的な評価であると、被付与者 (被レイベリング者) が感受することを指す。

私は、社会的ポジティブ・レイベリングおよび自己ポジティブ・レイベリングを包含したレイベリング論の概念枠組みを構築することが必要であると考えたものであり、そのために、本稿においては、以下の三点をレイベリング論のインプリケーションとして付け加えることとする。

① ポジティブ・レイベリングの抑圧性、すなわち行為者の自己アイデンティティをめぐる自他の定義の闘争と、その帰結として、社会的非承認による自己定義の相互作用上での無効化の苦痛。ここで「自他の定義」とは、自己の選り取るセルフ・コンセプトと他者から付与されたセルフ・コンセプトのことである。なお、相互作用上で無効化された自己定義は、それが社会的に承認されないがゆえに、かえって自己内部では強化されることとなるだろう。

② 社会的ポジティブ・レイベリングから自己ポジティブ・レイベリングへの深化、すなわち自己—他者関係の自己—自己関係への投射。

③ 対他アイデンティティに対するポジティブ・レイベリングと、対自アイデンティティにおけるネガティブ・レイベリングとの双対性。他者が行為者の対他アイデンティティに対してポジティブ・レイベリングを行えば行うほど、それは双対的に、行為者の対自アイデンティティにおけるネガティブ・レイベリングを強化させていくこととなる。その際、ポジティブ・レイベ

リングが②のように自己レイベリング化すると、当事主体の自己—自己関係においては、ポジティブ・レイベリングとネガティブ・レイベリングとが相互強化的関係を形成することとなる。

3. 自己—他者関係における ポジティブ・レイベリング

ポジティブ・レイベリングの特殊性は、ネガティブ・レイベリングの場合と比べ、レイベリングの拒絶という反応が当初は選択されにくいことにある。というのも、ポジティブ・レイベリングで付与される人格評価は社会的価値基準からすれば望ましいとされ、人々はそれを獲得することを社会的に動機付けられるからである。つまり、ポジティブ・レイベリングの場合は、ネガティブ・レイベリングの場合とは異なり、付与されるカテゴリーに随伴するポジティブな人格評価による一次的な苦痛が存在しないため、他者による定義がそのまま自己アイデンティティとして取得されやすい。仮に他者による定義と自己定義が食い違っている場合においてさえ、行為者のそれまでの自己定義が無効化されやすいということである。また、付与される価値がポジティブなものであることは、仮に被レイベリング者が自己定義の無効化を苦痛に思い、他者にクレームを申し立てても、それが被レイベリング者のアイデンティティにとって抑圧的に効果しているという認定を、他者に共有させるのに困難を伴うということである。社会的にポジティブとされる価値を獲得しその証明を行うことが個人に求められる社会において、相互作用場面におけるポジティブ・レイベリングの抑圧性が不可視なものとなっていると思われる所以である。

逆に、ネガティブ・レイベリングと同様の点は、いったんレイベリングが行われると、それに対して反論・反証する可能性があらかじめ封殺されており、付与されたカテゴリーを撤回させることが困難であるという点である。事例1において、内蔵助が、彼の放埒は忠義の手段としてのみあったのではないことを証明しようとすると、自己に対しての社会的評価を貶降させることになってしまう。そうしたリスクは、内蔵助ならいざ知らず、一般には、甘受するにはあまりに過酷なものである。また、もしむきになって証明しようとすればするほど、おそらくは内蔵助の「謙虚さ」の現れであるとして、いっそう彼の評価は高まったことであろう。かといって、肯定的に定義された対他アイデンティティをそのまま受容すると、それを支持する後続パフォーマンスを遂行し続けなければならないという苦痛が生ずることとなる。ポジティブ・レイベリングを受けた内蔵助はダブル・バインド状況に封じ込められてしまうのである。

次に見る事例2は、自己—他者関係におけるポジティブ・レイベリングであり、当事主体の後続行為が、ポジティブ・サンクションによって当為として拘束され、苦痛が感受されるようになるというものである。いわば、「期待が重荷」型のポジティブ・レイベリングである。

[事例2]

ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』の主人公ハンスは、秀才の誉れ高い模範少年である。

「ハンス・ギイベンラートの天分については、うたがいの余地がなかった。教師たちも、校長も、近隣の人たちも、町の牧師も、同級生たちも、そしてどんな人でも、この少年が秀才であり、総じて何か特別な存在だという

ことを、異議なくみとめていた。これがかれの未来は、決定され確立されていたわけだった。なにしろ、シュワアベン諸州では、天分にめぐまれた少年たちにとって、両親が富んでいないかぎり、たったひとつの細いこみちがあるだけだったのである。つまり、州試験を経て神学校へ、そこからチュウビンゲン大学へ、さらにそこから説教壇か、または講壇へ——という道である」(Hesse, H. [1905=1958:7-8] 下線引用者)。

ハンスは、父親や教師たちの期待を一身に集め、州試験に二番で合格し、首都の神学校に入学することとなる。そのための試験勉強の過程で、「うろついては遊びまわろくせを、かれはほとんどひとりでやめてしまった。授業時間にばか笑いをするなどは、かれの場合、とうに一度もなくなっている。園芸をやったり、うさぎを飼ったり、やっかいな釣りに行ったりする習慣も、おとなしく廃してしまった」(Hesse, H. [1905=1958: 61])。そのため、勉強は「このましいかぎりの繁栄を見せていた。そしてハンスは、ときおり一時間ばかり、釣りに行ったり、散歩してまわったりするたびに、何かうしろぐらい気持」を感受するにいたる (Hesse, H. [1905=1958: 64] 下線引用者)。模範少年、優等生といったポジティブ・サンクションが、ハンスの後続行為を、それに適合的なものへと誘導し、結果的に後続行為においてポジティブ・サンクションという期待が自己成就したわけである。そしていったん、行為(勉強の成果をあげること)と人格(優等生)との相互依存・相互参照関係が構成されると、当事主体自身、他者のポジティブ・サンクションに適合しない行為を遂行することに「うしろぐらい気持」を抱くようになる。すなわち、期待に対する背信の

もたらす罪悪感と不安感が、彼をいっそうの価値証明へと駆り立てるようになる。

試験に合格し、神学校に入学するまでの夏期休暇に、町の牧師がギリシャ語の手ほどきを申し出る。

「もしその気があるなら、わしとふたりで、この休暇中に、ちょっと手始めをやってみてもいいよ。(中略)辞書は貸してあげられるよ。それを、だいたい日に一時間、せいぜい二時間ずつ引くことになる。むろんそれだけでいい。何しろ、まず第一にきみは今、当然の休養をとる必要があるのだからな。いうまでもなく、これはひとつの提案にすぎないのだよ——そんなことで、きみの楽しい休暇の気持を、そこないたくはないからね」(Hesse, H. [1905=1958: 52-53])。

他者は、メッセージ・レベルでは、無理をするな、と言いつつも、メタレベルでは行為者への絶えざる価値証明の要求という形で、行為者がアイデンティティにとっての抑圧を感受せざるをえない状況定義を行う。まさに、「無理させて無理をするなと無理を言う」[第3回全国サラリーマン川柳コンクール(1990年)第1位](川人 [1990: 13])わけである。お前は優等生なのだからもっと頑張れ、それがお前のためなのだ、という「加熱」(竹内 [1995])・「煽り」(大村 [1990])にもかかわらず(=無理させて)その加熱・煽りを隠蔽し(=無理をするな)、行為者をダブルバインド状況に陥らせる(=無理を言う)。このダブル・バインドにとらえられた行為者が、それでも価値証明を存続させるならば、そこで感受される抑圧は自己の責任に回収されることだろう。

この事例2は、他者の期待(ポジティブ・サ

ンクション)が、ポジティブな後続行為に織り込まれるというものである。そして、こうした期待の自己成就過程は、いったん優等生として他者に定義されると、他者側の反作用を通じて、当事主体が優等生としてのアイデンティティを深化させていくという、社会的な増幅回路をその内実としている。ハンスの場合、優等生としてのアイデンティティとは、他者の視点の取得によって「自分は優等生でなければならない」という自己定義が形成され、かかる定義に適合的な後続パフォーマンスを反復する過程で強迫的に再生産されていくところの、「自分は優等生だ」という自己定義であるものと思われる。

4. 自己—自己関係における ポジティブ・レイベリング

[事例2—続]

牧師にギリシャ語の手ほどきを提案されたハンスは、この提案を承諾する。

「なぜなら、神学校に行って、そこでも同輩たちをしのごとくすれば、もっと野心的に、もっとねばりづよく勉強せねばならぬことが、かれにはよくわかっていたからである。そしてかれはぜひともしのいでやろうと思っていた。いったいなぜか。それは自分でもわからなかった。三年このかた、みんなはかれに注目している。先生たち、町の牧師、父親、そしてなかでも校長が、かれをげきれいしたり、しげきしたり、かりたてたりしてきた。長いあいだずっと、学年から学年へかけて、かれは押しも押されぬ首席であった。それで今になると、かれはしだいしだいに、主位に立つこと、そしてだれにも肩を並べさせない

ことに、みずから自尊心をうちこむようになっていたのである」(Hesse, H. [1905=1958: 53-54] 下線引用者)

釣りの好きだったハンスは、試験の一年前、「試験勉強があるからと言って、つりを禁じられたときは、じつにはげしく泣きわめいたものだった。魚釣り。それはなんといっても、長い小学校時代を通じて、いちばんの楽しみであった」(Hesse, H. [1905=1958: 12])。

しかしながら、釣りの禁止・試験勉強への専心という、外部から与えられた規範に従わないと、彼は「良い子」ではなくなってしまう。おそらくそうした他者とのコンフリクトを回避するため、そして何よりも、ハンスの自己内部で優等生としてのアイデンティティを維持するために、勉強に・優等生としてのカテゴリーに抑圧を感受しつつも、釣りの禁止を甘受したのであろう。すなわち、彼は当初、勉強という手段による自己の価値証明を他律的規範として受容していたものと考えられる。これを自己—他者関係におけるポジティブ・レイベリングとすれば、価値証明に「みずから自尊心をうちこむように」なった段階において、彼は外部の他者の視点を自己—自己関係に投射し、自己—自己関係におけるポジティブ・レイベリングを現象させるに至ったということができる。

この段階にまで深化したポジティブ・レイベリング、いわば「良い子がやめられない」型のそれは、レイベリングが自己過程内部に食い込み、自己自身が抑圧主体となっており、それゆえに、他者に対するクレーム申し立てという手段で抑圧を解消することが困難になっている。自己—自己関係に取得された他者の視点が、内部から自律的規範として作用し、自己の行為と人格とを拘束するという、自己レイベリングを

構成するわけである。

ここに見られるように、自己ポジティブ・レイベリングは、行為者の自己—自己関係に社会的ポジティブ・レイベリングの経験（もしくは予期）が他者の視点として取得され、それが自己のアイデンティティ構成と後続行為とに抑圧的な効果を及ぼすようなレイベリングなのである。そして、他者の期待に合致する行為を行うと、それがさらなるポジティブ・サンクションを呼び寄せることとなる。

さて、ハンスは、多感で反抗的な友人ハイルナアとの交際を契機に、勉強に身が入らなくなり、神学校の「落ちこぼれ」となっていく。

「それでもかれは、その交情のために損をしているとも、さまたげられているとも考えず、むしろそれはすべての失われたものを、十二分にうめ合わせるだけの、ねうちをもった財宝だと思っていた——その財宝とはつまり、今までのきまじめな義務生活などとは、くらべものにならないほどの、高められ、あたためられた生活であった。かれは、恋におぼれた若者のような生きかたをしていた。偉大な英雄的行為はできるが、日常の退屈な、こまかしい仕事はできない、という気持だったのである。そういうわけで、かれは再三再四、絶望的なためいきをつきながら、自分自身をかせるなかへはめこんだ」(Hesse, H. [1905=1958: 128])。

自己—自己関係に投射・取得された他者の視点（期待）は、ここにおいて相対化の契機を持つ。それは、取得された視点が準拠する価値規準とは異なる価値規準を持つ新たな他者との相互作用が可能にしたものである。しかし、ハンスにとっての新たな他者はたった一人であり、

ハンスを取り込む社会的価値規準に影響力を及ぼし脱レイベリングさせるまでには至らなかった。そこには、レイベリング集団との「[社会勢力] 差による関門」(大村 & 宝月 [1979: 185]) が存在したのである。

同時に、ハイルナアはレイベリング集団に対する「信頼性の関門」(大村 & 宝月 [1979: 185]) を突破することができなかった。神学校の校長はハンスに言う。

「わたしがきみの親友を格別すいていないことは、きみも知っているね。あれは不平不満の多い、おちつきのない人物だ。頭はいいかもしれないが、しかし成績は劣等だし、きみには決していい影響は与えないね。あの生徒からもっと遠ざかるようにしてくれたら、わたしは非常にうれしいと思うのだが」(Hesse, H. [1905=1958: 126-127])。

以上の事例2および事例2—続は、自己—他者関係におけるポジティブ・レイベリングが自己—自己関係におけるポジティブ・レイベリングに深化した形態であった。この形態の場合には、時間的に先行する自己外部の抑圧的視点が、自己—自己関係に取得され、自己レイベリング化したわけである。そして自己内部に取り込まれた抑圧的視点は、クレーム申し立てを不可能とすることを通じ、行為と人格との相互参照関係を増幅させる駆動力となっていく。すると、行為者にとっては、自己の行為によって絶えざる価値証明を行い続けるエスカレーションに投げ込まれたこととなり、それが逆に、価値証明を行わなければ自己は無価値であるという自己定義を強化することとなるだろう。

こうした自己定義関係を先鋭に表すのが、次に挙げる事例3である。

[事例3]

杉森 [1962→1994] の辿る作家・島田清次郎の足跡は、財産も学歴もコネクションもない境遇から、弱冠20歳で『地上』を世に問うに至る、自己ポジティブ・レイベリングを体現している。杉森は言う。

「島田清次郎が自分自身を天才だと信ずるようになったのは、彼があまりにも貧しくて、父親もなく、家もない身の上だったからにちがいない。彼は金沢の町はずれの小家の二階に間借りして、仕立て物の賃仕事をする母親と二人きりで暮らしているうちに、どうしても自分は世間に名を挙げねばならぬと決心した」(杉森 [1962→1994: 7])。

清次郎の父親は回漕業を営んでいたが、彼が生まれた翌年に死亡する。回漕業とはいっても舟持ちの船頭といった程度の家で、主人の死によって商売はたたまれ、清次郎は乳飲み子のうちに母親の実家へ——後に遊廓を経営する——連れて行かれた。小学生の頃、たびたび元の家の前で、母親に「ここがお前の家だったんだけど…お父っつあんさえ生きていたら…」と未練がましく言われ、「彼は幼な心に、いつか成人したら偉い者になり、この家を買戻そうと誓って、拳を握りしめた。現在は仮の姿であり、不当に辱められた状態であるが、いつか正義は行われ、失われた名誉は回復されるにちがいないという信念が、彼の中で徐々に固まっていった」(杉森 [1962→1994: 9])。

清次郎は学課成績がずば抜けていた上に、堂々とした挙止動作で級長としてクラスに君臨し、わけても作文は子どもらしからぬ複雑な思考力を示すもので、教師たちのある者は彼を神

童と呼んだという。

いったん東京の中学に入るも、再び金沢に戻った清次郎は、同級生に対して傲慢・不遜な態度で接した。

「彼が傲然として人を近づけぬ態度をとったのは、一つには彼が遊廓に住んでいることを恥じて、人に弱みを見られたくないと思ったためであった。東京から帰った後は、叔父の家から通学したので、遊廓から通うという弱みはなくなったが、長い間の習慣で、友達の前に肩を聳やかし、高飛車に出ることは、彼の身についた擬態になってしまっていた。清次郎の傲慢のもう一つの理由は、彼の家柄に対する誇りから来ていた。彼はどうしても、自分が美川町の相当な回漕業者の相続人であり、加賀藩の十村の血を引いている人間だということを忘れることができなかった。今こそ零落して、人からはどこの馬の骨とも知れぬあしらいを受けているけれど、元は相当の家の出である。今の地位は不当のもので、本来の自分はずっと社会の上層にいるはずである、という考えが、一日も頭を去らなかつた」(杉森 [1962→1994: 13-14])。

このように考える清次郎の日記には、しばしば次のような言葉が書き込まれた。

「清次郎よ、汝は帝王者である。全世界は汝の前に^{しやうやく}潜伏するであろう！」

「人類の征服者、島田清次郎を見よ！」(杉森 [1962→1994: 14] ルビ原文)。

「どうしたって自分は天才だと思はずにぬられない時がある。さうしたときの自分の心は誇らしいといふ気は少しもない。恐ろしい

崖の上から底の知れぬ深淵をのぞくやうな、何とも云へぬ恐ろしさを感じる。自然の深さ、偉大さが迫ってくる。自分ごときものにさへ、これだけの深さをめぐんでくれる自然であると思へば…」

「——人が何と言はうとも、自分は天才にちがひない。このことは、誰よりも自分が一番よく知つてゐる…」(杉森 [1962→1994: 21])。

杉森は言う。「いつも人の顔をじっと見つめ、相手が威圧されて視線をそらすまでやめないのは彼の癖で、それではじめて彼は相手を精神力で打ち負かしたと安心するのであった。しかし彼の奥底にはいつも臆病な心がはりつめていて、わずかの傷にもはげしく血を流しているのだと知る者は少なかった」(杉森 [1962→1994: 41] 下線引用者)。「彼の傲慢が実は卑屈の裏返しであることは誰しも気づいていた」(杉森 [1962→1994: 122] 下線引用者)という杉森の描写から読み取れることは、清次郎自身による、自己の否定的定義が先行しており、その否定的自己定義を回避するために、ポジティブな価値評価を随伴すると思われるカテゴリーを自己に付与し、そのカテゴリーにふさわしい行為を行うというパタンのポジティブ・レイベリングを行っているということである。いわば、ネガティブな自己レイベリングの拒絶手段としてポジティブな自己レイベリングを構成するということだ。こうした「良い子をやめられない」型のポジティブ・レイベリングは、先行する自己ネガティブ・レイベリングの駆動要因自体を解消するわけではない。清次郎の場合では、自分が天才であるという自己定義をいくら行っても、貧しさ・父親の不在・家の没落といった否定的自己定義を覆すことは困難であったろう。とい

うのは、彼が天才の自己ポジティブ・レイベリングによって獲得を志向した価値は、先行する否定的自己定義が準拠するところの、社会的威信、名声、地位といった価値基準と同一の価値基準上にあると思われるからだ。事例2—続と事例3とが相違するのは、この点である。そしてここで重要なことは、先行する否定的自己定義を覆すために肯定的自己定義に訴えるこうした戦略は、同一価値基準に拘束されている限り、肯定的自己定義のエスカレーションを招来し、そこからの離脱を困難にするということである。

この点に関して、浅野は、近代的自尊心を「個体内において自己への否定的評価とそれに対抗する肯定的評価とが相互に強め合う形でフィードバック・ループを形成しているような統合体である」と規定し(浅野 [1990: 13])、「自尊心のゲーム」について考察している。本稿と議論の文脈は異なるが、自己へのポジティブな評価の獲得のエスカレーションという点においては、本稿の自己ポジティブ・レイベリング(事例3)と同型であると言えるだろう。

5. おわりに

「『よい子』もしくは『よい人』——とりわけて虚構をはらんだ『暖かい家庭』のなかにいる『よい子』・『よい人』——の爆発は、今日、日本の一つの社会問題であるといってもよいように思われる。幼児期から老年期に至るまで、人生のさまざまな段階での精神障害、自殺、家庭内暴力、登校拒否、出社拒否等々、多様なかたちをとってそれはあらわれている。ユキの日記はこれらの問題に苦しむ人に代わってなされた内側からの証言として貴重である」(加藤 [1986: 114])。

【ユキの日記】を分析した、加藤の言葉である。本稿で、ポジティブ・レイベリングという現象をネガティブ・レイベリングとあえて同じく「レイベリング」という分析枠組みで把握したのは、概念的要請という以上に、加藤が挙げるこうした不可視の問題経験の基礎に、ポジティブ・レイベリングという相互作用が存在しているのではないかと思うからであり、また、「肯定的な評価を下されるのだから問題ない」というような一般的見方に異議を申し立てたく思うからである。本稿の目的とするところは、

一つには、従来明確な概念で把握されていなかった現象をポジティブ・レイベリングとして概念化し、それがレイベリングという相互作用の一形式であるということの指摘、そして第二に、ポジティブ・レイベリングの抑圧性を、場合によってはネガティブ・レイベリングと同等に見積もる必要があるという問題提起にある。取り上げた事例は文学作品ではあるが、——あるいはむしろ文学作品だからこそ——ポジティブ・レイベリングの当事主体の自己アイデンティティについての抑圧性を先鋭的な形で表現するものであると私は考える。

【参考文献】

- 芥川龍之介 1917→1968 「或日の大石内蔵助」『戯作三昧・一塊の土』新潮文庫
浅野智彦 1992 「自尊心」『ソシオロゴス』16
Hesse, H. 1905 *Unterm Rad*=1958 実吉捷郎訳『車輪の下』岩波文庫
加藤春恵子 1986 『広場のコミュニケーションへ』勁草書房
川人博 1990 『過労死と企業の責任』労働旬報社
黒柳徹子 1981→1984 『窓ぎわのトットちゃん』講談社文庫
大村英昭 1979 「スティグマとカリスマ——「異端の社会学」を考えるために——」『現代社会学』12 講談社
——— 1990 『死ねない時代——いま、なぜ宗教か——』有斐閣
———&宝月誠 1979 『逸脱の社会学』新曜社
Reckless, W., Dinitz, S.&Murray, E. 1957 “Self Concept as an Insulator against Delinquency” *American Sociological Review*, 21
———, ———, &Kay, B. 1957 “The Self Component in Potential Delinquency and Potential non-Delinquency” *American Sociological Review*, 22
———, Scarpitti, F.&Dinitz, M. 1960 “The ‘good’ boy in a High Delinquency Area: four years later” *American Sociological Review*, 25
———, ———, & ——— 1962 “Delinquency Vulnerability: a cross group and longitudinal analysis” *American Sociological Review*, 27
Rosenthal, R.&Jacobson, L. 1968 *Pygmalion in the Classroom: Teacher Expectation and Pupil's Intellectual Development*, Holt, Rinehart and Winston, Inc.
佐藤 恵 1994 「社会的レイベリングから自己レイベリングへ」『ソシオロゴス』18

- 杉森久英 1962→1994 『天才と狂人の間——島田清次郎の生涯——』河出文庫
 竹内 洋 1995 『日本のメリトクラシー——構造と心性——』東京大学出版会
 徳岡秀雄 1987 『社会病理の分析視角』東京大学出版会

(さとう けい)



〒101 東京都千代田区神田駿河台1-7
 Tel. 03-3294-4801 (定価は税込)
 Fax. 03-3294-7034

アジールとしての東京——日常のなかの聖域

奥井智之 東京をめぐる「上京」と「定住」の物語。漱石や小津のテクストを媒介に、駅、坂、橋など12のトポスから近代日本人の心性を問う。二五七五円

高齢化とボランティア社会

高橋勇悦・高萩盾男編 ボランティア社会は、「都市型社会」とどのような関連において登場しつつあるのか。高齢社会の今後を考える。一八五四円

関係の社会学

田中義久編 方法的「関係」主義の視座から、現代日本社会の内側に横たわる社会諸関係を分析し、その再構築をめざす社会学の挑戦。二五七五円

社会学入門

有末賢・霜野壽亮・関根政美編 「社会」の発見から21世紀社会の位相までを1冊に圧縮。新しい領域を拓く新世代のテキストブック。二八八四円

モダンを問う——社会学の批判的系譜と手法

森元孝 社会学の思想系譜をたどり、それらを活用して現代の社会運動が発するモダンの輝きとその陰りを見る。二八八四円

ライフヒストリーの社会学

中野卓・桜井厚編 「語られた生」をどのように記述するか？現象学的社会学などをふまえて、実践の方法を問う。二〇六〇円

語りのちから——被差別部落の生活史から

反差別国際連帯解放研究所編 日常化してゆく差別を生活の中でとらえ、ライフヒストリーの手法で描く。二三六九円

現代社会と人生の位相——社会学の視点

島崎征介編 「学歴」「結婚」「労働」「余暇」「老い」「医療」などをテーマに、社会学の言葉で人生を捉え直す。一八〇〇円

メディアと情報のマトリックス

田村穰生・鶴木真編 マスメディア・電気通信・情報処理など「メディア」と「コミュニケーション」の最前線。二五〇〇円

医療原論——医の人間学

竹内正監修 大井玄・堀原一・村上陽一郎編 第一級の執筆陣が生命と医療の原点を問い直し、21世紀の医療を臨む。三七〇八円

事典 家族

比較家族史学会編 社会学をはじめとする各領域の専門家五四〇名を結集した研究者必携の事典。B5判 一〇一二頁 二二六六〇円